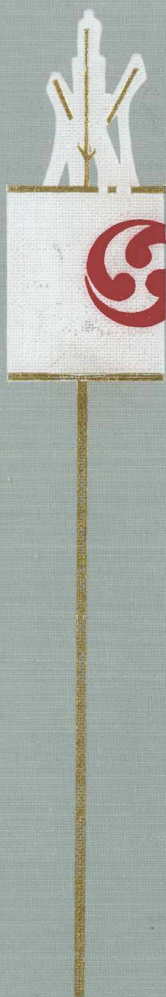


たけくら

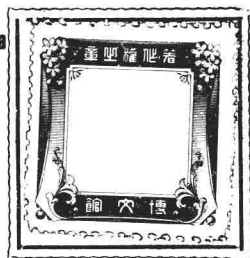


樋口一美

たけくらべ

◆ ◆
大正七年十一月二十三日發行

■ たけくらべ 奥付
正價壹圓四十錢



不許複製

編者 樋口 邦子

發行者 大橋 新太郎
東京市日本橋區
本町三丁目八番地

印刷者 高橋 季吉
東京市小石川區
久堅町百八番地

印刷所 博文館印刷所
東京市小石川區
久堅町百八番地

發行所 東京日本橋區本町 博文館

序じょ

一葉女史いちえふぢよしの才さいの逸いつと文ぶんの妙めうとは、世よ既に定評ていひやうあり、又また今更いまさらに何なにをか言いはん、かつや予嘗よかつて其全集そのぜんしふに序しよし、其日記そのにっきに跋はつし、又嘗かつてたけくらべを評うやうし、ほとく吾わが言いはんほつと欲ほつするところのものものを盡つくしぬ、こゝに芳篇ほうへんの新刊しんかんに臨のぞみて、蕪詞ぶしの再題さいだいを需もとめらるゝとも、足そくを蛇腹だふくに畫えがくの愚ぐも、まことに恥はぢかゞやかしく、糞ふんを佛頭ぶつとうに加くはふるの痴ちも、いと罪得つみえがましきことなれば、筆ふでを執とりて書かかましきおもひ有あること無し、たゞ予が女史ぢよしの才さいを重おもんじ文ぶんを愛あいするの心こころの、今いまに於おいて渝かはらねば、

天の女史に假すに壽を以てして、才老い文熟し藝よりして
道に至るに及ばしめざりしを傷むの念のみ深くして且長
し、おもへばはるかなる昔となりぬるが、予一日森子に誘は
れて女史を訪ひしことありき、まだ會はぬほどは、如何なる
人ならんと疑ひまどひ居たりしが、かねてより耳にしたり
しことどもは、よしなき人のさがな口の偽りにして、まのあ
たり見たる女史は、色白く姿やすらかに、かどくしくいか
つげなる方などは、いづくにも無くて、さのみ肥えもせず瘦
せもせぬ身の、丈は高からず、よろづ弱げに女らしくて、なよ
なよとしたるといふまでには無けれど、春の樹の小雨にた

をやぎたる如く、やはらかにおとなしき人なりき、起居しと
やかに、ものいふ聲音も若き女の常なみのやうに華やぎて
浮きては聞えず、言葉づかはひさすがにうるはしく、ほどほ
どにつけての受けこたへなんど露おろかなることなけ
れど、歲月久しくまじはれる隔無き友にはいざ知らず、なべ
ての人の前には、中々おもふことの二ツ三ツならでは打出
して云ひも得まじきやう見えたれば、いかでかゝる人を世
には飽迄世なれて心のまゝに振舞ふやうに云ふらん、此君
内の才は雖すでに囊にたまらぬ鋭さありとも、外のすがた
は米いまだ稈をはなれぬおもむき無からずと思ひき、其の

後はまだ生若き身の若き婦人を足近く訪はんことも憚り
ありとおもひ過せる中、やがて其病めるを聞き、又やがて其
訃を聞き、白玉の樓と黄塵の世と、幽明路杳にしてまた逢ふ
べくもあらずなりぬ。古き語に、人を識る一面に在り、酒を品
するたゞ三杯といへり。我豈一面にして女史を識り盡せり
と謂はんや、然はあれど吾觀たる女史は正に是の如くなり
き、嗚呼一席の因縁、半日の晤言、月日流れて疾く、二十餘年の
夢とはなりしが、溯りてしづかにありし日を考うれば、秋巖
の筆の靜者安とありし額の下に、頭やゝ低うしてつゝまし
やかに坐りしめやかに語りたる、薄皮だちの人の清らなる

おもかげ、やさしき肩つきも、おぼろげながら眼に浮ぶ心地
してなつかしく、黯然として其の不幸短命を傷むのおもひ
に禁へず、しかも人世は短く藝術は永し、女史の文、今猶生き
て、女史の才、終に死せず、これ壽無くして壽有るといふべし、
又今更に何をか傷み何をか言はんや。

大正七年十月

幸田露伴識

七月二十日 雨風おびた。午後二時ごろ
斗らす三木君、幸田君を伴ひ來る、はじめ
逢ひ參らす、我れは幸田露伴と名のらるゝに
有さまつくぐうち守れば色白く胸のあたり
赤く丈はひくゝしてよくこえたり、物いふ聲
に重みあり、ひくゝしづみていと靜にかた
る、めざまし草に小説ならずともよし、何
か書きもの寄せられたし、こをば頼みに來
なりといふ。(日記『みづのうえ』の一節)

序^{じょ}

最早^{もっとう}數年前^{すうねんぜん}のことである。私は一葉^{いちよう}女史^{にょし}に就^ついて次のやうな言葉^{ことば}をある物^{もの}のはじに書^かきつけて見^みた。

『近頃^{ちかごろ}は種々^{いろく}な方面^{ほうめん}に偶像^{ぐうざう}破壊^{はくわい}者^{しゃ}が起^{おこ}つて來^きた。新派^{しんぱ}の婦人^{ふじん}がしきりに一葉^{いちよう}破壊^{はくわい}を企^{くは}てて居^ゐるのも、矢張^{やはら}それだ。

——一葉^{いちよう}の破壊^{はくわい}が始^{はじ}まつたのは、あの日記^{にっき}が公^{おほやけ}にされてからのことだ。もし一葉^{いちよう}にすぐれたところがあるなら、それは破壊^{はくわい}された後^{あと}でもすぐれたものには相違^{さうゐ}ない。あだかも好^よく出^で來^きた城^{しろ}は、残^{のこ}つた後の城址^{じやうし}としても好^いいやうなも

のだ。

——一葉は物を考へる人として特色のある人では無かつた。一葉の日記を公にしたことは、彼女の艱難な生涯と幾多の興味ある挿話とを展げて見せたには相違ないが、一面に於いては、彼女の最も不得手なところを併せ開放した趣がある。藝術とは何ぞや。戀愛とは何ぞや。それらの問題进行を思考する上には今日の婦人は幾倍かの有利な位置に立つて居る。偶像破壊者はその弱點に乗じて起つて來た。

——假に今日の婦人の文學者が一葉時代の文學の空氣の中に居て、身を一葉の位置に置いたとしたら奈様なものだ。

らう。今の時に偶像破壊者であることは左程骨の折れないことでは有るまいか。何故といふに、大抵の人が皆偶像破壊者だから。

——破壊された後の一葉には何が残るだらう。大音寺前の活畫は後になつて見ても矢張り相違ない。當時の文學の空氣の中で、あれだけに自分の創作を日常生活に近づけたことや、あの才氣のある風俗の觀察や女としての激情などは一葉の價値を定めさせるものであらうと思ふ。』斯うした自分の心持は今になつて見ても變らずにある。女史の藝術は才氣のある筆觸に富むところから、最初女史

の書いたものに接した頃は兎角その才氣に酔はされ過ぎて味ふといふ前に酔つてしまふやうな氣がしてならなかつた。時が経てば経つほど私は女史の作品にあらはれて居るやうな才氣のことなどを忘れて行つた。あの言葉と言葉の間から湧いて来る豊かな感情や底に籠るしみじみとした心持が残るやうになつて行つた。今日のやうに讀んだり書いたりする婦人も多くない當時の空氣の中にあつて、獨りであゝいふ藝術を紡ぎ且つ織つて行かれた女史の姿がしのばれる。

大正七年十月

島崎藤村

目次

口 くち 繪 え ……………	鏡 かがみ 木 き 清 きよ 方 かた ……………	卷頭
序 じよ ……………	幸 かう 田 だ 露 ろ 伴 はん ……………	一—五
序 じよ ……………	島 しま 崎 さき 藤 とう 村 そん ……………	一—四
『たけくらべ』(眞筆版) しんぴつはん ……………		一—四九
『一葉の墓』 えふ はか ……………	泉 いづみ 鏡 かがみ 花 はな ……………	一—四
『一葉と其師』 えふ そのし ……………	戸 と 川 がは 残 ざん 花 はな ……………	五—八
『一葉女史とその和歌』 えふぢよし ……………	佐々木 ささき 信 のぶ 綱 つな ……………	九—二五
『一葉女史を憶ふ』 えふぢよし ……………	三宅 みやけ 龍 りゆう 子 こ ……………	二六—三一

『一度見た事のある一葉女』……………	岡野	知十	三二—三八
『二十三回忌の秋に』……………	平田	禿木	三九—四七
『一葉女史の追憶』……………	戸川	秋骨	四八—五八
『跋として』……………	馬場	孤蝶	五九—一〇
『樋口一葉君略傳』……………	同		一一—一二三
『一葉著作年表』……………	同		一二五—一三四

(なはり)

たけくら

車馬、高き、うらうら利ね、
たる、面々の外は、あや、
て、胡粉、ゆり、うら、
裂き、けり、
二軒、
こ、
何と、
は、
へ、
一、